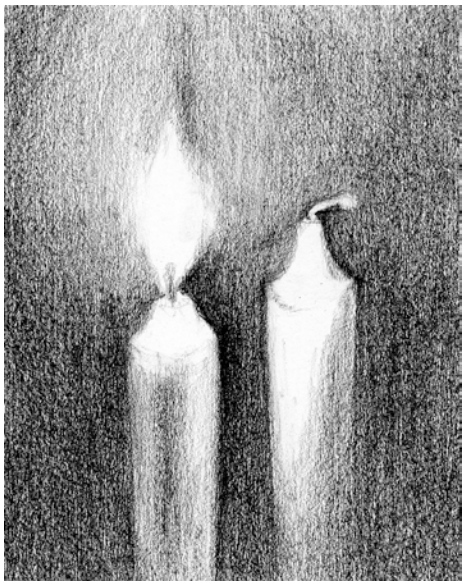
雷の子

カトリック町田教会
町田市中町３-２-１
電話　042-722-4504
ＦＡＸ　042-722-4512

いかずちの子

http://www.machida-catholic.jp/



「喜びなさい、恵まれた方よ。
主は あたなとともに おられます」
ルカ．１：28

名にし負はゞいざ言問はむ

主任司祭　林　正人

二〇二二年も、まもなく幕を閉じます。コロナ禍に関しては、本年も「完全脱却」とはいかず、昨年、一昨年程の恐怖感はないものの、懸念を残しながらの年越しとなりそうです。

しかし、それよりも私たちを不安に陥れたのは、国家間の戦争、紛争、緊張状態、そして内戦や特定民族の迫害等、国、または権力者の横暴によって多くの人間の尊厳が脅かされていること。今年は特に深刻の度合いが増したのではないでしょうか。

無益な戦争に駆り出されている人々がいます。自国の軍隊に銃口を向けられている人々がいます。政府の軍備拡張の犠牲になり、その日の食物にも事欠いている人々がいます。国家に限らず、何と言いましょうか、「大きなシステム」の犠牲になっている人々が、今の世には溢れています。それは日本も決して例外ではありません。

かように悲しみ、苦しみの横溢する中、今年もクリスマスが巡って来ます。苦しみの只中にある人々に、私たちキリスト者は、どのように「救い主の到来」の意味を知らせればよいのでしょうか。

そのためには、イエス様の「救い方」とはどのようなものなのか、先ず確認しておかねばなりません。

およそ「宗教」というものは、その名を使って犯罪・犯罪的行為を行うようなものでない限り、みな共通の目標を持っています。それは「人間の救い」です。そして各々の宗教は、その目標を達するため、独自の「救い方」を持ちます。では、我がキリスト教の、イエス様の「救い方」とはどのような方法か。それは「共に在る」「共に生きる」という仕方です。

イエス様の「救い方」は、例えばウルトラマンのように、人間を苦しめる怪獣を「シュッワッチ！」と倒すようなものではありません。神である方が自ら人となり、人間と共に歩まれた。喜びも、悲しみも、苦しみも、一緒に引き受けてくださった。そして、最終的に「死」までも…。人間の心情を誰よりも解ってくださる方であるからこそ、イエス様は全人類の「救い主」なのです。

「共に在る」「共に生きる」、このイエス様の「救い方」で何よりも重要なことがあります。それは「私たちにもできる救い方」だということです。私たち人間は、ウルトラマンのような「救い方」はできません。しかし、イエス様のように「人と共に歩む」ことはできます。イエス様が何故、神の子からすれば「制限ある」人となり、人間を救おうとされたのか、それは私たちもまた、人と共に歩んで、「イエス様の救い」をもたらすことができるようにするためです。私たちキリスト者は、人と共に歩むことによって、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」（ローマ12－15）ことによって、世に救いをもたらす「キリストになって行く」のです。

「キリスト」としての私たちが、いま問われています。「私と共に喜んでくれますか？　私と共に泣いてくれますか？」と。

主の御降誕、この恵みの時に、各々自分のできる「インマヌエル」（マタイ1－23）を考えてみましょう。私たちから多くの人が、キリストの救いを見出すことができますように。

聖書と歳時記

運営委員　結城　万紀子

六年程前、友人に誘われて俳句を始めました。俳句は五七五の十七音に季語を一つ入れて作ります。同じ十七音でも、川柳は季語を特に入れません。では、川柳の方が楽かというと、季語の助けがないので大変だと聞きました。例えば「師走」とか「年の瀬」の季語は、コートの襟を立て慌ただしく追われるような季節が思い出されます。季語一つで沢山の説明を省く事ができるのです。

ある時、季語の中に聖人の名前や典礼が多く含まれている事に気が付きました。一八〇三年、曲亭馬琴によって「俳諧歳時記」が作られました。歳時記は言葉の変遷に伴って幾度も編纂されています。

では、どの時点で歳時記にキリスト教関連の季語が組み込まれたのでしょうか？

「福音歳時記」（鷹羽狩行監修・永井房代・永井芙美編）によると、明治になってキリスト教が解禁になり、キリスト教にまつわる句が詠まれるようになったとあります。

私の推測ですが、宣教者によってもたらされた聖書は、外国の文化や習慣を知る「歳時記」のような働きをしたのではないでしょうか？

クリスチャンの俳人も増え、また、クリスマスや復活祭が一般にも広まるようになるにつれキリスト教関連の句が詠まれ、歳時記にも収蔵されるようになったのでしょうか。先日、カトリック教会枢機卿の前田万葉句集を戴きました。

烏賊墨の一筋垂れて冬の弥撒　万葉

ありがたく命生きよとクリスマス　万葉

この句集には英語表記もされています。町田教会図書に寄贈しますので、是非お読みになってみて下さい。私の大好きな作家の藤沢周平もこんな句を詠んでいます。

十薬や病者ら聖書持ち集ふ　周平

氏が結核の療養中の句かと思います。俳句が聖書と共に人に寄り添っているようです。私の参加している句会の主宰、浦川聡子さんの句にもこのような句があります。

膝みえてぬる花冷えの懺悔室　聡子

未信者の方が教会を訪ねた時の緊張感を花冷えという季語で感じられます。

もうすぐ、クリスマスです。前述した「福音歳時記」には全て聖書に関わる句が取り上げられていますが、クリスマスの季語を使った句だけで、二五七句載せられています。

聖夜劇イエス幼き膝を閉ぢ　鷹羽狩行

キリスト役の子供の小さな膝が見えるようです。

皆様、良いクリスマスをお迎え下さい。

香部屋の活動

牧野　千佳子

「雷の子」からの依頼を受け、しばし離れている香部屋の仕事について、記憶を頼りに書かせて頂きます。

私にとり、香部屋は神聖な場所で、足を踏み入れるのに身体が固くなった感覚が今も残っています。

＊ミサの祭壇奉仕

前回の香部屋係の方が準備して下さった状態を確認し、ミサに必要な聖具を所定の所に置いていきます。ミサ後は全てを片づけます。ミサで使用した聖布は家で洗いますが、御血（ワイン）のついた部分を先ず水洗いし、この水は直接排水管に流さず、花、植木等に散水します。全て洗濯しアイロンをかけて香部屋に納めます。ミサで使用したロウソクは芯が長くなり煤がたれるのですが、芯の調節をして

下さる方のお陰で、ミサ中に消えることも煙が立ち上ることもありません。

大祝日、聖週間、洗礼式等の特別の日はそれぞれ必要な物、例えば御復活のロウソク、聖香油、洗礼者の白い布、ベール等必要な物を用意し、所定の場所に置いておきます。平日のミサでは、祭壇の準備以外に先唱を致します。

＊灰の水曜日の灰の準備

前年の枝の主日で祝別されたシュロの葉を灰にします。隣に消防署があった頃は「灰を作りますので煙が出ますが…」と一声連絡しておりました。雨や風の強い日は、神父様のガレージで作り、日曜日に「こげ臭いけど何かあったの？大丈夫ですか」と言われたこともありました。

＊御葬儀のミサ

御葬儀は帰天された方と御遺族友人達との悲しいお別れです。御葬儀で初めてカトリックと接する方も一緒にお祈りを捧げ、カトリックを少しでも感じて頂ければと思いつつ毎回参列しております。ミサの準備、献花のお手伝いをします。

＊ミサ用パン、ワイン、ロウソク等の注文

ミサで使用する物が不足しないよう、前もって各所に注文をしています。

以上、コロナ禍による若干の変更はあるものの、現在でもミサの準備は基本にもとづいて行われています。

コロナ下の共同墓参

鈴木　節子

コロナ以前の共同墓参は、例年11月第3日曜日の午後に、教会からマイクロバスに乗り合わせて府中墓地へ出かけていました。車がなくても教会まで来ていただければ墓地まで行かれたので、バスを利用されていた方々には今年の共同墓参の実施について、大変心苦しく思っております。

また昨年、一昨年は神父さまのみにお祈りをしていただいておりましたので、今年の墓参を計画するにあたり、いつまで続くのか先の見えないコロナ禍で密を避けるためにと、あえてマイクロバスを断念し、平日の現地集合といたしました。もちろんマスクは着用です。

墓参の流れは府中墓地聖堂での聖歌で始まり、祈り、聖書朗読、説教を聞いた後、墓前に移動して聖歌と祈り、灌水と献香、最後に参加者に祝福をいただいて終わりとなります。

今年（11月9日）は林神父さまのはからいで、墓前でのお祈りの後、なんと1人ずつ灌水（お墓へ聖水を振りかける）を行うことが出来ましたのは18名という人数がもたらした幸いでした。

風のない穏やかな秋晴れの下、お香の煙と共に墓誌に刻まれたお名前に懐かしさを感じると同時に、真新しい刻字には寂しさがまだ募ってしまいます。しかし、復活を信じる私達との再会をこれからも待ち続け、見守って下さることでしょう。

平日のメリットなのか、霊園内は静かで他に団体はなく、心配していた駐車場もまだ余裕がありました。お天気にも恵まれてなによりでしたし、来年はバスで来られたら…と思いながら帰路につきました。

最後に、カトリック府中墓地霊園は住宅地の中に位置し、霊園内は平坦で歩き易いです。町田教会の墓所は小教区区画の一番奥にあり、木の形のモニュメントはとても印象的です。モニュメントに何と彫ってあるか、お時間がある時にぜひご覧になってくださいませ。

また、共同墓地についてのご案内は町田教会事務所にございます。随時お申し出下さい。（関連写真は4ページ）

特別寄稿

福音に照らされて共に歩みましょう

東京教区助祭　熊坂　直樹

町田教会の皆様、ご無沙汰しております。去る九月二十三日に助祭叙階の恵みを頂いてから幾月か経過しましたが、皆様から多くの祈りを賜りましたことを、心より感謝申し上げます。そうしたご厚意に触れるにつけ、私に授けられた叙階の秘跡は、私個人のものに留まらない教会全体への恵み、人々への奉仕のための賜物だということが、心に染み入ります。

このように、私は奉仕者としての一歩を踏み出したところですが、周りを見回すと、パンデミック、軍事侵攻、気候変動など、時代は混迷の度合をいっそう増しており、この先の道のりは、一人で歩めるものでも、歩むべきものでもないと実感しています。

だからこそ私は、日本の教会の一員として、そこに集う信徒、聖職者、修道者、日本人、外国人など、多様な立場の方々と共に歩むことを切実に必要としています。私たちが、信仰の喜びを分かち合いつつ、今の時代の人々の苦しみに寄り添い、その人々に福音を届けるために創造性を発揮するときにこそ、私たちは、永遠不変の神の神秘に立ち返ることができるからです。

先行き不透明な今の状況にあって、見えない方を信じるキリスト者として、人々にイエス・キリストの福音の光をもたらすことができるように、互いに巻き込み、巻き込まれながら、祈りのうちに一つになり、ともに歩んでまいりましょう。

ドイツのクリスマス

渡邉　竹夫

「ドイツ」で「クリスマス」といいますと、なにが連想されるでしょうか？歌でしょうか？クリスマスマーケットでしょうか？

ドイツは、ご存知の通りルター派宗教改革発祥の国でもありますし、イメージ的にプロテスタントが優勢と思われがちですが、実際、ドイツ全土の宗教統計上はちょうどカトリックとプロテスタントが半々です。ただし、東はプロテスタントが圧倒的多数で南はカトリックが圧倒的多数、中西部が半々というように、地方によって差があります。

そのため、クリスマスソングも、自分はカトリックの信徒だからといってカトリックの作曲家や司祭が書いた歌しか歌わない＆聞かないということはできないくらいまざっています。また、日本では、特にコマーシャルや街頭で11月後半とか12月に入ってからすぐにクリスマスソングがガンガン流れますが、ドイツではそれはめったにありません。

日本とドイツのクリスマスでもう一つ大きく異なるのは「サンタクロース」の扱いです。日本ではクリスマス当日にプレゼントを配るという役回りであるのに対して、ドイツでは、クリスマスをふさわしい心で迎えるためにその年よかったところを褒め、悪かったところを懲らしめ、ちょっとしたプレゼントを配って帰ります。クリスマス当日の主役はイエズス様となりますので、幼子イエズスがプレゼントをくれます。

また、ドイツのクリスマスツリーの電飾は点滅しません。なぜなら、本物のろうそくもちかちかしないからです。

ドイツは針葉樹林の国ですので、家の中でもセントラルヒーティングが直接当たらないようにすれば、主のご公現どころか1か月以上後、すなわち2月の「主の奉献」の祝日まで持つこともざらです。

「主の公現」は、再び子供たちが中心となります。「星の合唱団」という3人の博士に扮した子供たちが小教区内の各信徒宅を訪ね、鴨居に「ＣＭＢ」と白いチョークで書いていきます。このＣＭＢというのは、3人の博士の名前である「カスパール」「メルキオール」「バルタザール」の頭文字です。

お互い、神様の恵み豊かなクリスマスになりますように。

聖堂での祈り（右）と町田教会墓所の墓碑

共同墓参

11月9日

信　者　動　静

2022年10月～12月

（個人情報のため、削除しています）